展 景

季 刊

No.110

Summer 2023

季刊　展景 110号

目次

眼科〈短歌〉……布宮慈子　4
屋形船〈短歌〉……市川茂子　6
四つ切白菜〈短歌〉……梅津純子　8
公孫樹に感謝〈短歌〉……大橋千佳子　10
一日〈短歌〉……小野澤繁雄　12
リハビリテーション〈短歌〉……河村郁子　14
土産〈俳句〉……新野祐子　16
〈那須通信 55〉共に生きる……加藤文子　18
〈薫風颯々 29〉バードの越えた峠道……神村ふじを　22
対詠　ごきげんいかが？　PART 86……小野澤／布宮／河村　26
前号作品短評A……28
前号作品短評B……31
〈梅津純子歌集『白き川』を読む〉
志縁の人たち、沖縄、風土を詠う……小野澤繁雄　34
雪国から沖縄に思いを馳せる……布宮慈子　35
無二の会短信……38
編集後記……42

今号のイメージ／ニンニク

眼科

布宮慈子（やすこ）

右目だけ涙が溜まるわれの目をそのままにして一年半過ぐ

年とともに変化はあらむ身体も心も素直に受けいれていく

溜まりくる涙を拭いてドライアイよりよいかしらと極楽とんぼ

運転のときにも涙は溜まりゐて常にハンカチ手放さぬまま

溜まりゐる涙の量と頑固さを天秤に掛けつひに決意す

新しき眼科クリニックのドアを開けアンケートを書く静かな時間

初に行く眼科のアンケートに答へれば十年も行かぬ訳を問はれて

涙とは鼻に流るるものといふ詰まり診るため通水検査す

左より右目の方が通水はうまくゆかぬと目薬もらふ

桜桃の季節は梅雨と重なれば眼科出で来て空を仰ぎぬ

屋形船

市川茂子

屋形船クルージングで橋巡り日暮は岸の景色を見つつ
船清（ふなせい）の桟橋を出て進みゆく東京港のレインボーブリッジ
日の落ちて酔客にぎわう船内は出来たての料理配られてゆく
スカイツリーの真向いに来て停泊し横に満月出できて見放（みさ）く

漆黒の川面を静かにすべりゆく暗き水底へ吸われゆくがに
時折は大き船行き屋形船ゆれて提灯しぶきを浴びる
隅田川スカイツリーやお台場とライトアップの橋をくぐりて
そこかしこ紫陽花のつぼみ咲きはじむ梅雨のきざしに時は移ろう
デイサービス休みたいような今朝の空梅雨近き雨しとど降りいて
雨ごとに新緑の木々盛り上がり目交（まなか）いまぶし夏に入りゆく

四つ切白菜

梅津純子

去年伐りし南天の幹にやはやはとうなだれ伸びる新芽の紅き
春陽さすコンクリートの空池にぎんなん数多(あまた)白く転がる
公園の植込みを向き膝をつく若者のカメラ何を狙ふや
サ、サーッと植込みより走り出る顔赤き雉の緑羽輝る

植込みの陰より雉の走り出すを若者が追ふカメラを顔に
急激に暑くなりたる一日(ひとひ)過ぎ今日雨の中牡丹咲き初む
薄紅の牡丹のやはき花びらに重たげに降る晩春(おそはる)の雨
やうやくに薄き花びらほどきゆく牡丹の花に降る雨重き
四つ切の白菜の芯厨べに緑を帯びてふくらむ気配
厨べに春を知るらし四つ切の白菜の芯青く立ちくる

公孫樹に感謝

大橋千佳子

空へ空へ緑の梢しならせて公孫樹は立てり最後の初夏に
安らかな最期であれと祈るごと若き樵は良策を練る
深緑となれど扇のひとひらはしっとりとひんやりと柔らか
しなやかなイチョウ青葉は布のよう横には引けど縦には伸びず

ビロードよりシリコンに似た手触りに億年生きる葉の強さ知る
黄葉を拾い上げては愛でていた六十余年の何と浅はか
寡黙なる先輩のもと伐採すユウヘイ君よ抽斗は増す
お清めの酒の匂いをまといつつ樹は薪へと切り分けられぬ
南西の角の空虚に西日差すほぼ真円の切り株すがし
この家と共に育った二十年瞬きの間か公孫樹にすれば

一日

小野澤繁雄

小凶運の日々なる一日その今日は幸町をいきかえりして
ミスド店内制服の色よしとみればわれのオールドファッションのいろ
第二公園に人の姿はすべり台下るところがすぐにも砂場
家内にこたつがみえて声もするみえるところにいる家の人

このわれに一日すぎたるその一日一日にひとつチョココロネ食ぶ
藤の花水のほとりにみる花は腰のたかさに垂れて大きさ
何かが何かになるその機転コンビニがコインランドリーになる
春水は川にながれてここに満つ新堰みればあふれておりぬ
あゆむみち工場にいきあたりして一青年がそのうちに入る
工場にたてる三本日の丸に社旗に緑十字それらならんで

リハビリテーション

河村郁子

ゆくりなく圧迫骨折かうむりて安静七日後の起立に「わたくし」
歩行器にすがりて歩きすぐさまにリハビリテーション訓練に入る
退院後は介護認定規定にて訪問リハビリ週二回受く
初対面の理学療法士は二十代　名は旅人（たびと）とぞ　畏れ多かり

九年前の大病以来怠けたる筋力改善まづは旨とす
前傾は膝を曲げずに腿裏と腰と背中の筋肉伸ばす
上体を後ろに反らす動作にはお腹の筋肉伸ばすイメージ
当を得る利発な指導に苦手なる片足立ちにも挑戦すなり
無理をせず続けることが大切と訓練メニューを考案下さる
身体の筋肉相互の機能と維持　今にして識る後悔しきり

土　産

新野（にいの）祐子

多様性守る「国家戦略」昭和の日

『ショック・ドクトリン』地図広げつつ読む日永（ひなが）

＊ナオミ・クライン著『ショック・ドクトリン――惨事便乗型資本主義の正体を暴く』

冥途の土産　誘われゆくカヌーツアー

パドル漕ぐダム反対派ダム湖かな

指先の解けぬこわばり霾（よな）ぐもり

ＭＲＩに映る黒穂を抜きに抜く

炎帝の疾風怒濤連れて来し

難病の友を囲みて三句

ローマ書七章告ぐカフェテラス南風（みなみ）吹く

短夜や思いに言葉追いつけぬ

手土産は粽（ちまき）祈りの容（かたち）せり

〈那須通信55〉

共に生きる

加藤文子

展覧会で盆栽を展示する際には、植物名のほか盆養年数も一緒に表示してきた。

盆養年数とは、私が育ててきた年月のこと。植物との生活、そこに含まれた日々を想っていただけるような機会になればと思い、記している。

正確かどうかというと曖昧な点もあるが、一九九六年にさいたま市から那須に移住したので、記憶をたどる上で目安になっている。さいたま市の頃からの盆栽か、あるいは移住後に入手したものなのか、思いおこすことでおおよその時間がわかる。

実際に数えたことはないが、大小さまざま最低四百鉢くらいはあるのだろうか。毎日様子をみてきたせいか、自然にそれぞれを覚えてしまう。来歴も思い出せる。

独立当初から四十年近く一緒の盆栽は、道のりを共にしてきたお馴染みさん。おりおりのシーン、思い出が詰まっていて感慨深い。

小さな鉢でも三十年、四十年のものもある。コーヒーカップ型の鉢で育つヒメトクサも、三十八年くらいになる。夫がコーヒーカップを作陶する際、植物用に作ってくれたのだ。

一番最後にした植え替えはいつだったのか記憶は定かではないが、少なくとも二十年以上は行っていない。片手で持てるくらいのサイズの鉢中で元気に育っている。

長いあいだ植え替えをしないと、鉢中は根でいっぱいになる。成長の行き場を鉢中から盆上に求めた結果、根の力で表土を押し上げていく。少しずつ盛り上がりながら、今ではヒメトクサの球体がカップの上に載っているかのような姿を呈するようになった。このままいったら、カップの背丈より上のヒメトクサの方が高くなってしまいそうだ。いつか頭部が大きくなり過ぎて倒れてしまうかもしれない。

植え替えを毎年しないと調子をくずすものもあれば、カップのヒメトクサのように植え替えをしないまま数十年順調に経過するものもある。はじめから計画したことではなく成り行きでなったことなのだ。

植物名は分類できても、個々の未来を予測するのは難しい。同種の植物であっても、スタートは同じであっても、成長過程で異なった性質を帯びてくる場合もある。

鉢で育てるのは難しいと言われていても案外易しかったり、丈夫で安心なはずがそうではなかったり……。ある時期までデリケートで苦労したものが、次第に手のかからない状態に変わることもある。例外や不思議がたくさんあるからおもしろい。

枝の強弱のバランスを調整するのに時々剪定をする。そんな時、取り除いた枝を挿し木したり、摘み取った実を蒔いてみようと、ふと思いつく。

すべてがうまくいくわけではないが、良い具合に成長してくれることもある。これから三十年とか四十年後は見ることはできないだろうと思いながらも、今日もイセハナビの挿し芽をしている。

＊イセハナビ（伊勢花火）…東南アジア原産のシソ目キツネノマゴ科、イセハナビ属の多年草。

カップ型の鉢と一体となったヒメトクサ
Photo：岩瀬 陽一　ヒトガタ作品：中村学　ガラス作品：家住利男

〈薫風颯々29〉

バードの越えた峠道

神村ふじを

山形市のイザベラ・バード研究家、渋谷光夫先生は今年1月、バードに関する2冊目の著書『山形のまちとイザベラ・バード』を出版された。

書評が山形新聞にも掲載され、「歴史的背景やバードの人物観、紀行文それ自体の分析をまるごと対象化し、山形―日本―英国を貫く同時代の在りようを深掘りしていく。その作業はまるで『バード・山形百科事典』を編さんしているようだ」と絶賛された。

この本の特徴は、およそ研究書には似つかわしくないような「んだんだ情報」などというトピックを随所に織り込み、例えばバードの名前を冠したワインを取り上げて、山形の「ん（う）まいもの」として紹介したりしている。溢れんばかりのデータ、内容なので、これが研究書の箸休めとなっていてとてもいい。実は先生とは昔同じ職場で仕事をさせてもらった間柄であり、先生の個性、性格を知っている者としては、さもありなん、彼らしさ溢れる好著になった。

ここでイザベラ・バードについて記しておこう。バードは19世紀イギリスの旅行家、探検家、紀行作家で、本名をイザベラ・ルーシー・バードと言い、江戸末期の１８３１年（天保２）、イギリスのヨークシャー州で牧師の娘として生まれた。

彼女は、幼少時大変病弱で、時には北米まで転地療養していたと言う。そのことがきっかけとなって、長じて旅に憧れるようになったと言う。

安政年間にアメリカ、カナダへ旅行。日本へは明治になってから、１８７８年（明治11）の６月から9月にかけて、東京から日光、新潟、山形に入り、日本海側から北海道に至る大旅行をしている。

バードはこの旅行を紀行文にまとめ、日本では「日本奥地紀行」と題して出版されており、当時の街道筋の宿場や貧しい山村の様子を克明に記録している。

バードは新潟から山形に抜ける際、越後米沢街道の難所十三峠を通った。この街道は急峻な山々に囲まれ、人馬が越すには困難を極めた。だが、置賜地方に塩や海産物を運ぶ重要なルートであったため、木や石を積み上げ、木道、敷石道として整備が図られていた。

その中の難所のひとつ黒沢峠は、新潟県境の大里（おおり）峠から数えて５つめの峠で、標高こそ４００メートルそこそこだが、急峻な悪路の山道が続き、丁寧に石が敷き詰められていた。

バードが峠を越えたのは7月12日、美しい山毛欅の緑も深みを増してきた頃だったと思うが、黒

沢には泊まれる宿がなかったことから、降雨と暗がりの中を市野々まで進んでいる。「きのう旅した道のりは12時間かかって18マイル（約28・8キロ）」と、旅路の過酷さを記している。

この黒沢峠を含む十三峠は、バードが旅した6年後に、鬼県令として知られる三島通庸が小国新道（現国道113号線）を開削したため、その役目を終えて、百年近くの間森の中に深く埋もれることになった。

1980年（昭和55）、小国町黒沢地区の住民を中心に、「黒沢峠敷石道保存会」が設立され、道筋と埋もれていた敷石を見事掘り出すことに成功したのである。

私が訪れた5月中旬の黒沢峠は、当時の苦労を思い起こさせるかのように、鬱蒼とした森の中に敷石道が見え隠れし、この急峻な山道をようよう抜けてこそ、置賜盆地を彼女をして「東洋のアルカディアを見た」と言わしめたことになったのではなかろうか。連日の雨が上がり、峠を越えた晴れやかな心情が伝わってくるようである。

深緑や碧眼乗せし牛の背　ふじを

参考資料：渋谷光夫『山形のまちとイザベラ・バード』（霞城出版、2023年）
渋谷光夫『イザベラ・バードの山形路』（無明舎出版、2011年）
イサベラ・バード著、高梨健吉訳『日本奥地紀行』（平凡社、1973年）
山形新聞2023年（令和5）5月10日付「味読　郷土の本」の書評から

対詠　ごきげんいかが？　PART 86〈2023〉

O　小野澤繁雄
N　布宮　慈子
K　河村　郁子

何ごとかもつれているやききなれて鶯のこえ四月の山に　4月22日　O

何ごともなき一日なり速報のメール「大谷6号2ラン」　4月27日　N

日曜朝は女子のソフトの練習かベースあたりの草抜いている　5月2日　O

数人の小父さん小母さん手芸店にグラウンド・ゴルフに使ふ布を選る　5月11日　N

自転車の練習をしているは父子そばでまもるはその祖父ならん　5月18日　O

子ども用ピンクの自転車ふえたるは最近越して来し人のもの　5月28日　N

グランドゴルフはチームプレーじゃないからと内田さん話人気の訳に　6月2日　O

ジュワジュワと集団のこゑ響きゐて梅雨空は暮る椋鳥ならむ　6月13日　N

梅雨に入り小学生の傘の色　黄色に混じる桃色うれし　6月13日　K

実をみぬはオス木だからか山桃ののけぞりながら公園木は　6月18日　O

実るなく香るとてなきあぢさゐの瑠璃の花たま雨にかがよふ　6月21日　K

何十年ぶりに作りし「なた巻き」を毎日食べて昔語りす　6月27日　N

のびすぎか木立仕立てかアベリアに花生臭きにおいもぞする　6月30日　O

菩提樹のあまた青き実香るなく花の華やぎ籠りて揺るる　7月2日　K

菩提樹はインドにつながり思ひ出す優しく弱き裕之くんを　7月7日　N

「みんなの願いがかないますように」短冊はこれも七夕願いのひとつ　7月14日　O

空梅雨の笹の葉かさかさ揺るるのみ「祈　平和」の墨書短冊　7月17日　K

梅雨明けと見らるるといふ発表に久しぶりなる青空を吸ふ　7月22日　N

前号作品短評A〈小野澤〉

●この十二年つくりし輪こそひこばゆる　　新野祐子

ひこばゆる。動ヤ下二、孫（ひこ）生ゆから、という。漢字、蘖（ひこばえ）もつかわれる。（晩）春の季語。蘖で、こんな例句がある。蘖や涙に古き涙はなし（中村草田男）

この十二年、は東日本大震災からの経過年。つくりし輪、とは有機農業者つどう（前句）とあるところから、その人たちの結びつきか。それでひこばゆる、で継承されていることが強調された。タイトル「フクシマ再訪」なので、全体がやや報告のかたち。

不耕起説くミミズ博士の自然体
いろいろキーになることばがある。不耕起はアクチュアルな話題でもあるが（じぶんはさいきんしった）、ミミズ博士の方は検索すると「生きている土」という言葉とセットになっていた。ここには、過去と未来を含む現在がある。

帰還困難区域よりノスリの巣立ちかな
雲雀揚がらぬ田んぼは除染の轍のみ

●数人がウインドブレーカーを着て歩くのみなり霞城（かじやう）公園　　布宮慈子

一連タイトルは「早春の水」。歌で、城跡の土手に、梅園と呼ぶほどはなき梅の木、思い切って出てきて城址公園、と順に触れられているように、四首目のこの歌で、霞城公園と名称がでたが、そこの往来に伴って、詠われた歌で一連になっている。フキノトウまた白梅。季節は早春で、ウインドブレーカーでよいほどの気温なのだろう。数人が、という入り方がいい。歩いている人をみるのみ、という。情景が浮かぶ。ウインドブレーカーのカタカナと霞城公園の名称のもつやや重さ（歴史性）。

水は、お濠、淵の水（八、九、十首目）。往路があれば復路がある。反復するものも。

三年の記憶とふものあやふやに疲れ果てたるマスクがひとつ
いろいろ重ねてみることができる下句。おもうものがある。
冬の日にお濠の土手に飛んできし翡翠（かはせみ）の色おもひて歩く

●見るかぎり雲一つなく冬の陽はわが生日の頭上を照らす　　市川茂子

見るかぎり雲一つなく。関東では冬によくそんな日がある。町中では空を邪魔するものがあり、そんなことでも、見るかぎり、である。生日は（せいじつ、と読んで）変換した。誕生日のこと。歌は一人（自己）祝福でもあるようだ。改まった感じがある。

古き家解体されて新築の立て看板を見つつ通りぬ

通りにある変化の一つ。ここでは古き家と新築。立て看板にもよるが、分譲（売り家）ということかもしれない。古き家が解体されてそこに新築の家が建つ。そういうことはあることだが、一通りの関心をひく。見つつ通りぬ、はじぶんの年齢からもその関心のありようがわかるような気がする。ところで、一日は天気そのもので、ながい籠もり居もあって、天気予報は大きなものになった。この歌の寒波は記憶にあるようだ。

十年に一度の寒波とう予報その夜は風をともないて冷ゆ

前号作品短評B〈慈子〉

●いつに見し雲一つ無き青空か僥倖のごと弥生の空晴る　　梅津純子

雪国に住んでいる人なら、この感覚、この喜びを経験していることだろう。それほど春先に見る青空はうれしく、尊いものに思えるのだ。したがって「僥倖」という一見大げさな比喩も素直に受けいれられる表現である。

次の歌集編まむと既に幾年かフクシマ辺野古ウクライナ続く

歌集にはただごと歌も必要とふ亡き師の言葉をりをり甦る

第二歌集を出そうと何年も前から考えている作者。その間にも、福島第一の原発事故や沖縄の辺野古沖の埋め立て、ウクライナでの争いと「ただごとならぬこと」が起きている。しかし、亡き恩師の言葉も忘れてはいない。「甦る」は「かへる」と読ませるか。

とことこと歩き始めた小さき人わが知らぬ世を生きゆく背よ

最終に置かれた歌。コロナ禍に生まれた孫は一歳半になっていて、このたび初めて会ったのだ。

「背」は「そびら」と読む。自分の人生に照らして孫を見つめる、心に迫る歌である。

●初めての一月開始の手帳繰る四月以降の白さまぶしく　　大橋千佳子

一月から始まる手帳を初めて使うのだという。今までは四月始まりの手帳で、予定はぎっしりだったのだろう。ことしは四月からのページが空白。決まった予定がない寂しさも少しはあるが、自分で決めていけることがうれしい。そう受け取れる。

「いい人」のレッテルもらい自分から剝がす勇気もなく退職す

神妙を飛び越え友は「平日に遊べる人が増えて嬉しい」

作者は長いあいだ教職にあったようだ。決断して退職はしたものの、その後の気持ちの揺れを丁寧に表現している。退職という一大事を友人に報告すると、神妙に聞いてくれると思ったら、平日に一緒に過ごせることを喜んでいる様子。肩透かしを食ったようでもあるが、あれこれ複雑な思いを抱いているのは自分だけなのだと、友の現実的な反応を肯定してもいる。人生の中の変化を徐々に受けいれようとする作者像が見える。

●老年は犬にもありて残生はわずかなるかやあわれさに似る　　小野澤繁雄

犬も老いる。特に最近のペットは栄養状態がいいから長生きするらしい。見かけた犬はかなり老いていて、残された生はわずかだろうと思われるが、かわいそうなくらいだ。当然、老犬の様子を人の生、または自分の人生に重ね合わせており、しみじみとした歌となっている。

バス停にきてしる読みの向台（むこうだい）生きてこのよの解のひとつか

バス停で「むこうだい」という読み方を知るということは、この世の数ある疑問に対する解答の一つだろうか。向台というのはよく見かける地名だ。取り立てて意味があるとも思えないのだが、此岸や彼岸などと考え合わせると、また違った趣の歌になるだろう。次もちょっと面白い歌。風車は「かざぐるま」と読ませるか。

ちぎれんがごとくに風に風車鳥除けの鳥みることもなく

〈梅津純子歌集『白き川』を読む A〉

志縁の人たち、沖縄、風土を詠う

小野澤繁雄

「山麓」所属の著者の第二歌集。三十五年になるという歌歴。前歌集から十四年経過、その期間の歌で、六四〇首を収めたもの。改めて旧かなでまとめることをした。多くの人との出あい（と別れ）、そのうちとくに志縁（しえん）の人たちとの関係が思い深く詠われた。これが印象の一つ。フクシマ、沖縄に関係する歌々。著者は「小さな声の側から社会を見つめてきた」という、その一人、したがってどれも人の間の、歌数ほどに行動的で、しっかりとした歩みをみせている歌。

仙台の駅前にバス待てば列の長きに若者ばかり

一人始めし「太陽の子」上映運動を共に担ひき母のごとくに

風土、家族、またその現在が詠われて、それぞれに印象深い。疎開、朝ドラでしられる登米市に育ち、のち結婚で山形県に住むようになった。米沢市、ついで長井市在住、これで人生の半分という。仙台で銀行員をしていた時期もある。手堅い表現、伝わるもののある歌集だとおもう。

スキー疲れを顔には出さず笑みつくり銀行員の週の始まる

降る雪を流るるごとく風運ぶ二階の窓を白き川ゆく

〈梅津純子歌集『白き川』を読む B〉

雪国から沖縄に思いを馳せる

布宮慈子

まず思ったのは、この時期によくまとめたものだなあ、ということだった。作者はここ数年、体調がすぐれない様子だったから、歌集を編むというその集中力に驚かされた。また、長く新かな遣いで作歌してきたのに、全部を近年始めた旧かなに統一したというのにもびっくりした。しかし、あとがきを読んで、その並々ならぬ心情を理解した。

降り続く雪に籠れる厨べに芹の一把のみどり明るし（P28）

手作りのメッセージ掲げ歌ひゆく二万の叫び「さよなら原発」（P55）

てんたう虫と蛹二つを茄子の葉にそっと包みて自然農の友来（く）（P97）

藤の花桐の花咲き朴の花終はりて峡はただ深緑（ふかみどり）

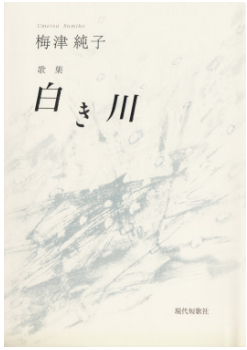
「ゆるぎなき希望」の文字に背筋伸ぶ辺野古の浜の座り込み日記（P186）

降る雪の風にさらはれ流れゆく部屋内にみる空中の川（P199）

独り倒れ逝きたる友の面穏し戦阻まむ思索の一生（ひとよ）（P214）

河内愛子さん逝く

間をおいてとつとつ語る言の葉のユーモア鋭さ比類なかりし（P215）



ターザンロープ端から端まで試さむと再び向かふ街の公園（P230）
氷雨から霙となりて雪となるこの地を忘る秋空澄めば（P243）
夫と兄の調査にかけし十五年大伯父の伝記つひに世に出づ（P247）

『カナダ移民のパイオニア　佐藤総右衛門物語』

赤き実を捥(もい)で酬(さは)して剥(むい)て干す祝祭のごと柿の秋ゆく（P259）

印象に残った歌を選び、十二首に絞ってみた。作者は若いときに沖縄復帰前にもかかわらず、たいへんな思いをして沖縄のペンフレンドに会いに行く。その情熱たるや、すごいものがある。行動力はいろいろな場で発揮されてきた。灰谷健次郎の「太陽の子」の上映、原発事故のあった福島へ行き原発反対の集会に参加すること、理不尽なかたちで米軍が駐留するの沖縄への思いから、沖縄に関する映画の上映等々、どうやって成し遂げてきたのだろうと思う事柄ばかりだ。だが、終盤になると大伯父のカナダ移民の歌が出てくる。この大伯父のパイオニア精神が作者に受け継がれ、同じ血が流れていることをわたしは疑わない。ターザンロープへの再挑戦の歌は、年齢よりずっと身体が若く動きたくて仕方がないという感じで、お茶目な性格を表している。

歌集には辞書にはない「志縁(しえん)」という語が出てくる。「志縁」は女性史研究家・もろさわようこさんが生んだ言葉。高齢のもろさわさんに取材を続けている人がいる。その信濃毎日新聞記者・河原千春さんの解説によると「ジェンダーという概念が入ってくる前から、もろさわさんは『男らしさ女らしさは生まれつきのものではない。社会的につくられたものだ』と発言していました。地縁、血縁でなく生き方、志。

志縁。それこそが人間の自由につながるという考え方です」。もろさわさんは信州、沖縄、高知に拠点をつくり、女性や被差別部落、沖縄など、一貫して差別される側に立ち、在野で行動してきた人だ。作者は、もろさわさんの言葉に影響を受け、それが生き方のベースにあると思われる。

山形県は雪国である。南西部の置賜(おきたま)地方は、北部の最上地方に次いで雪の多いところである。宮城県で育った作者にとって、逃れようのない雪は苦痛だったかもしれない。歌集の題名になった「白き川」は次に置かれた歌を見ると「空中の川」なのであった。しかし、長井の地に根を下ろし、四季の草花を丹精込めて育てながら生きてきた作者。また自宅の柿の木から捥いでつくる干し柿はプロかと思うほど上手だ。なんでも手を抜かない作者像がここでも浮かび上がる。

選んだ歌のうち何首かは、わたしが約十二年前に山形に戻ってから知り合った人たちの歌である。故郷とはいえ、幼なじみはいても友達は一人もいない状況だった。作者をはじめ知り合いになった人たちがいたからこそ、自分は寂しい思いをすることなく暮らしてこれた。とりわけ故河内(こうち)愛子さんには思いが強い。河内さんとの付き合いが長かった作者も同様だろう。河内さんはご高齢ながら読書量がすごかった。「独り倒れ…」と「間をおいて…」と二首を取り上げてみた。河内さんには友人知人、ケアマネさんや生協の職員までファンが多く、いつも誰かしら訪れる人がいた。独りのときに亡くなられたのだが、最後まで自宅で過ごしたことは立派だと思う。わたし自身が河内さんについて作歌できなかったぶん、歌集の河内さんの歌をオマージュとして、深く心にとどめたのであった。

無二の会短信

◆ゴールデンウイークに、名古屋の甥のお膳立てで長男と二人して、屋形船に連れて行ってくれた。何しろ年寄りを運ぶのだから、他の家族は同行できない。三月のお彼岸の時もお墓に連れて行ってくれた。終の住処を確認できて安心している。屋形船ではごちそうを食べることが楽しみだった。次々と出来たての料理が配られてくるので、それを頬張りながら、最後の晩餐のような気分で心残りなく食べられた。

市川茂子

◆雨の中で郭公が鳴いている、西日本は梅雨入りしたようだ。第二歌集『白き川』が出てから一ヵ月になる。展景の仲間の皆様に、出版社から突然にお送りしたが、御目通しいただけただろうか。昨年の八月の多発筋痛症発症とほぼ同時期に縁あって、迷い続けていた歌集発行を現代短歌社からに決めた。沖縄やフクシマに関する社会詠は背景や時期、事実関係に間違いがあってはならず調べ直しや推敲に時間がかかった。読む側と製作費を思えば歌数を出来るだけ減らしたい。朦朧とする頭で四校を重ね、現代短歌社もついには私の迷いに付き合い「念校」という五稿までとってくれた。無我夢中のうちに月日が過ぎ季節が巡っている。皆様の住所はお仲間ということで教えていただけた。加藤文子様には早くにお葉書を頂き、疲れ切った心身が励まされる思いで有難かった。一言でも反響があると嬉しい。歌集、句集、小説など突然送りつけられるものには、正直なところ迷惑なものもある。自分の時間を費やして読み、感想まで書くのは簡単ではない。そう思う私自身、一方的にお送りし反響を心待ちにしている。どうぞお許しください。筋痛症発症といい、私は業が深いのだろうか。

梅津純子

◆二階の屋根を軽く越えたイチョウの木を、遂に伐ることにしました。手狭な庭に分別もなく、大木となる苗を植えたことへの後悔と、すくすく伸びるイチョウへの申し訳なさに、当日まで落ち込んでいましたが、知り合いの美容師さんに「決断したのなら、感謝して送ってあげて」と言われ、物事の考え方や付き合い方の大事な一面に気付きました。自分、自分、でいないかと。前向きな人から勇気をもらい、できるだけ前向きな言葉にしてみました。

大橋千佳子

◆朝から真夏日になったという昼のニュース。つゆの間でもある。こたつ掛け（布団）を片づけ残していた。コインランドリーで洗う（一枚700円、表示20分余り）。その間、店のつづきのスーパーのカフェコーナーで本を読む。一日で読み切れるので、このごろ、新書を読むことが増えた。ここでは『動物がくれる力』（岩波新書）。当然に読み切れない。つゆの間は混みますよと店の人（午前

中だけ在店しているという）。乾燥機づかいか。店内乾燥機の方が数が多い。この店では子のスニーカーを洗ったことがある。専用機がある。こたつ掛け、は薄いものにしているというしりあい。自宅の洗濯機次第で、洗うという。時間がかかるので、乾燥は自宅ベランダでした。前線の雨で天気はこのところ不安定、それで、不在にもできない。大物といっても洗濯物、それがすんで子にも話をした、ここ数日のわが家のニュースである。

小野澤繁雄

◆絹さやが毎日収穫できるようになって、朝の食卓を賑やかにしてくれるようになった。絹さやは秋のうちに種を蒔いてしまう人もいるようだが、我が家では三月の半ば過ぎに芽出しをし、雪の消えた畑の一角に定植する。肥やしは嫌い、連作は嫌いとなかなか扱うのは難しいが、お汁でもおひたしでも美味しい。マヨネーズにもよく合う。食感を楽しむ春野菜の優等生である。「絹莢の葉には必ず絵描き虫」

神村ふじを

◆長い間、お休みさせていただきました。編集部には励ましをいただき、歌作りに自信を無くしかけていましたが何とか戻ることができました。思いがけない腰椎の圧迫骨折、激痛と七日間の安静には閉口しました。実感として、転ばないことを肝に銘じています。無事に卒寿が迎えられるよう念じて、気を付けています。

河村郁子

◆今年五月十一日の朝日新聞には驚いた。「有事に輸入が止まるなど国内で食料が不足する事態に備え、農林水産省が農産物の増産を農家や民間事業者に命令できる制度をつくる方向で検討を始めた」「具体的には、花農家にコメやイモをつくるよう命令したり、限られた食料がまんべんなく消費者に届くよう事業者に指示したりできるようにすることを検討する」。これまで国は「食料はアメリカから輸入するから農家は花卉でもつくっていろ」と言っていたのに、何という方向転換！それに農家に命令するだなんて！　肥料はじめ耕作に必要なもの全てを大幅に値上げしておきながら。食料は有事に備えてではなく国内自給するのが基本だ。江戸時代のような地域循環型社会をつくっていこうという機運が高まればと期待したいが、現状はほど遠い。私は野菜を個人で売っていて農協には加入していないので、農政全般をよく承知していない。田植えや野菜苗販売に忙殺されている友人たち、あと一週間したら一段落するだろう。この問題についてぜひ聞いてみたい。

新野祐子

編集後記

◆河村郁子さんが検査入院後しばらくたって「展景」と「対詠 ごきげんいかが?」に復帰してくれた。これからも無理をせずに歌を作ってほしいものである。

109号において、大橋さんの短信を手違いにより前号と同じものを印刷してしまいました。正しくは以下の通り。「学校勤務を今春辞めることにしました。長年の、十代と共に過ごせる大切な大切な日々と、遂に決別。決まってからは、振り返るでもなく先を期待するでもなく、『ありがたい今』をフワッとした感じで過ごしています。生徒たちをネタに詠めなくなったとき、退職の実感がわくのでしょうか。大橋千佳子」。お詫びして訂正します。

〈おすすめ本〉

・『コロナ禍の東京を駆ける――緊急事態宣言下の困窮者支援日記』（稲葉剛、小林美穂子、和田静香 編、二〇二〇年十一月）

（本書は東京・中野区に拠点のある「一般社団法人 つくろい東京ファンド」の二〇二〇年四月からの緊急事態宣言下における活動記録だ。中心は、スタッフの小林美穂子さんの支援活動日記。当時、ネットカフェからも締め出された人たちが「つくろい」に助けを求めた。困っている人に同行して自治体の福祉事務所などに出向く様子は、手に汗握る、というより読むほうも怒りがふつふつと沸いてくる感じ。圧巻は、受付窓口で同行した人ではない別の困窮者が、大事な電話がくるからと携帯の充電を懇願するのに対し、がんとして受け付けない職員の「区役所は税金で賄ってるので」と言うのに対し、たまらず介入する小林さん。「あなたの給料もですよね。そして、その方は長い人生の中で随分と税金を払ってきたと思うのですが…」というくだり。事は深刻なのに、小林さんの理路整然とした明るい態度は救いだ。入管法改悪といわれている昨今だが、この国はずいぶん前から自国民すら守ろうとしてこなかったことがわかる）

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景 110号
二〇二三 年七月三十一日 発行
編集・発行人 布宮慈子
制作 スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright © 2023 MUNINOKAI. All rights reserved.